

The Japanese Association for Metastasis Research

NEWSLETTER Vol. 50

- 第27回 学術集会のご案内
- 第26回 学術集会/総会を終えて
- 第26回 総会報告
- 寄稿 谷口俊一郎名誉会員(22回会長)
濟木育夫名誉会員(16回会長)
- 第21回 研究奨励賞受賞報告
後東久嗣(徳島大学)
- 会則/役員選任規程/役員名簿/変更届



JAMR

日本がん転移学会

URL : <http://jamr.umin.ac.jp>

第27回日本がん転移学会学術集会/総会の開催にあたって

会長 越川 直彦（神奈川県立がんセンター臨床研究所 がん生物学部）

第27回日本がん転移学会学術集会・総会会長を担当させていただきます神奈川県立がんセンターの越川直彦でございます。このような貴重な機会を与えて頂きました理事、評議員、会員のすべての先生方に心より感謝申し上げます。

第27回日本がん転移学会学術集会・総会は、2018年7月19日（木）、20日（金）の2日間の日程で、横浜を代表するランドマークの山下公園、横浜港を眼下に臨むホテルメルパルク横浜で開催致します。本学会で研鑽し、がん研究者として成長させて頂いた者として、この度、会長の任を賜り身の引き締まる思いでございます。このような栄えある会を運営するにあたり、不慣れなためご不便をおかけするかと存じますが、どうぞ、多くの先生方のご参加をよろしくお願い申し上げます。

さて、早期診断法、外科療法、薬物療法の目覚ましい進歩により、がんは治る、または、コントロール可能な慢性疾患となって参りました。一方で、進行がんや再発がんなどの難治がんは早期に転移を生じるため、現存する治療法で満足いく治療成績が得られておりません。従いまして、転移形質を有する難治がんを制することががんの完全制圧には必須であり、本学会発足からの基本理念である「転移を制するものは癌を制する」ことと同義でございます。

最近、免疫チェックポイント阻害剤による新たな免疫療法は転移がんを消失させること、また、抗がん剤を内包した高分子ミセル型ナノキャリアが、がんのリンパ節転移に有効性が高いことが示されました。これら成果は、今後のがん治療において非常に期待されるところでございます。そこで、今回の学術集会・総会では、「がん転移制圧に向けた異分野融合による技術革新」をコンセプトとして、工学、化学、数理学などの異分野技術を融合した独創的ながん転移研究を進めておられる国内外の研究者、医師によるご講演をシンポジウムで企画致しました。多くの会員の先生方に参加頂き、融合領域という新たな総合的英知を端緒に、基礎、臨床、企業の三位一体となったがん転移制圧を推進するべく、熱い議論を盛夏の横浜でお願い出来ればと存じます。

横浜は多くの学会が開かれる定番の地ですが、本学術集会・総会の横浜開催は初めてであり、横浜の風情をご堪能いただける「関内地区」を会場と致しました。この地は我が国にとって約150年以上前に西洋文化の窓口となった、まさに文明開化の発祥地です。山下公園以外にも元町、中華街、外人墓地等の名所が徒歩圏にございますので、学会の合間にヨコハマの異国情緒で日頃の疲れを癒やし、新たな鋭気を養って頂けたらと存じます。真夏の暑い時期ですが、多くの先生方のご参加をお待ちしております。宜しくお願い申し上げます。

会 期 : 平成30年（2018年）7月19日（木）～20日（金）

会 場 : ホテル メルパルク横浜

テーマ : “がん転移制圧にむけた異分野融合による技術革新”

第27回総会事務局

【運営事務局】

株式会社ライフメディコム 〒111-0054 東京都台東区鳥越2-13-8

ホームページ <http://waaint.co.jp/jamr2018/>

E-mail : jamr2018@lifemedicom.com

第26回日本がん転移学会学術集会・総会を終えて

第26回日本がん転移学会会長 土岐 祐一郎
(大阪大学大学院医学系研究科 外科学講座 消化器外科学 教授)

第26回日本がん転移学会学術集会・総会を平成29年7月27日（木）、28日（金）の2日にわたり、大阪市の大阪国際会議場において開催させていただきました。梅雨明けの35℃を超える猛暑の大阪にもかかわらず376名の先生方にご参加いただき、盛大に会を終えることができました。ここに、学会に参加いただきました先生方に心よりお礼を申し上げます。

本学術集会はメインテーマとして外科医として日常の臨床の場で向き合っております「がんの微小転移」に着目し、「微小転移の制御によるがんの根治を目指して」を掲げ、基礎から創薬・臨床まで、多くの先生方に闊達なご発表・ご討論をしていただきました。その他シンポジウムとして「がん幹細胞に対する新たな知見」「がん微小環境における免疫細胞の誘導と制御」についてご議論いただきました。また、9つのワークショップ、一般演題を含め総数170題の貴重な研究をご発表いただきました。各セッションを担当していただきました座長の先生方、そして素晴らしい研究発表をしていただきました演者の先生方には心より感謝申し上げます。

特別講演では、吉森 保先生（大阪大学）に現在脚光を浴びています「オートファジーの分子機構と疾患における役割」について大変興味深いお話をいただきました。また教育講演として、山本浩文先生（大阪大学）より「大腸癌微小転移の基礎と臨床」をテーマに実臨床に直結する内容のお話をいただきました。

我々が当初想定していた以上の多くの先生方にご参加いただき、成功裏に終えることができました。これらは、名誉会員・理事・評議員の先生方をはじめ、多くの会員の先生方のご支援とご協力の賜物と思います。会期中は様々、不行き届きの点があったと思います。改めてお詫びと、皆様方のご寛容な対応に感謝いたします。

本学術集会を励みとして、今後より一層の本学会ひいてはがん転移研究の発展のため、当教室といたしましても微力ながら尽力して参る所存でございます。今後とも倍旧のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

最後に本学術集会・総会の開催・運営に多大なご協力・協賛いただきました企業・団体各位に事務局スタッフとともに、心より厚く御礼を申し上げます。



ポスター賞受賞者

第26回日本がん転移学会総会記録

平成29年7月27日（木）評議員会で下記報告事項と議案が審議され、さらに同日の総会において報告・承認された（総会出席者 71名、委任状 116通）。

I - 1. 庶務報告

1) 会員状況（平成29年7月20日現在）

顧問：3名 名誉会員：20名 功労会員：25名

個人会員：628名 法人会員：7社

※評議員会において平成28年10月30日に逝去された菅野 晴夫 顧問の黙祷を行った。

事業報告

1) 学術集会

平成28年7月21日・22日、米子コンベンションセンターに於いて学術集会を開催した。

2) 評議員会・総会

平成28年7月21日の学術集会開催時、米子コンベンションセンターに於いて評議員会の議を経て平成27年度収支決算・平成28年度予算、第26回副会長越川直彦選任を審議決定し、総会にて報告した。

3) 理事会を3回（H28.10.7：横浜、H29.3.3：大阪、H29.7.26：大阪）

4) ニューズレターの発行

Vol. 48（平成28年9月）、Vol. 49（平成29年6月）

2. 平成28年度収支決算および監査報告書が提出され承認された（次ページ）。
3. 平成29年度予算（案）が承認された（次ページ）。
4. 平成29年度役員（会長・理事・監事）が承認された（次ページ）。
5. 次期副会長に鹿児島大学 消化器・乳腺甲状腺外科学の夏越祥次理事が選出された。
6. 第16回会長の済木 育夫 先生、第22回会長の谷口 俊一郎 先生が名誉会員に、竹之下 誠一 先生、西村 行生 先生が功労会員に推戴された。
7. 研究奨励賞を1名に授与した。
8. 平成29年3月、事務局の移転先についての報告があった。
住所：大阪府中央区大手前3-1-69 大阪国際がんセンター・研究所内
電話/Fax：06-6945-0355

平成28年度収支決算

(収入の部)

成28年 1月 1日
成28年12月31日

科 目	予 算	決 算	差 異
年会費	(4,100,000)	(4,351,000)	(251,000)
個人会費	2,700,000	2,951,000	251,000
法人会費	1,400,000	1,400,000	0
戻入 (総会補助費)	0	144,842	144,842
預金利息	(500)	(180)	(△ 320)
普通預金	500	180	△ 320
収入合計	4,100,500	4,496,022	395,522
繰越金	8,117,693	8,117,693	0
総計	12,218,193	12,613,715	395,522

(支出の部)

自 平成28年 1月 1日
至 平成28年12月31日

科 目	予 算	決 算	差 異
事業費	(2,200,000)	(2,200,000)	(0)
学会総会補助費	1,500,000	1,500,000	※ 0
研究推進活動費	500,000	500,000	0
研究奨励賞費	200,000	200,000	0
会議費	(300,000)	(160,262)	(139,738)
理事会等会議費	300,000	160,262	139,738
管理費	(2,235,000)	(2,071,081)	(163,919)
印刷製本費	200,000	162,972	37,028
通信運搬費	350,000	329,652	20,348
消耗品費	50,000	2,651	47,349
給与・手当	1,330,000	1,322,066	7,934
旅費	60,000	55,880	4,120
諸雑費	80,000	68,129	11,871
賃貸料	150,000	129,731	20,269
ホームページ費	15,000	0	15,000
予備費	(500,000)	(0)	(500,000)
支出合計	5,235,000	4,431,343	803,657
繰越金	6,983,193	8,182,372	0
総計	12,218,193	12,613,715	395,522

※：平成29年度「第26回日本がん転移学会学術集会(総会)」補助費

(財産目録)

自 平成28年 1月 1日
至 平成28年12月31日

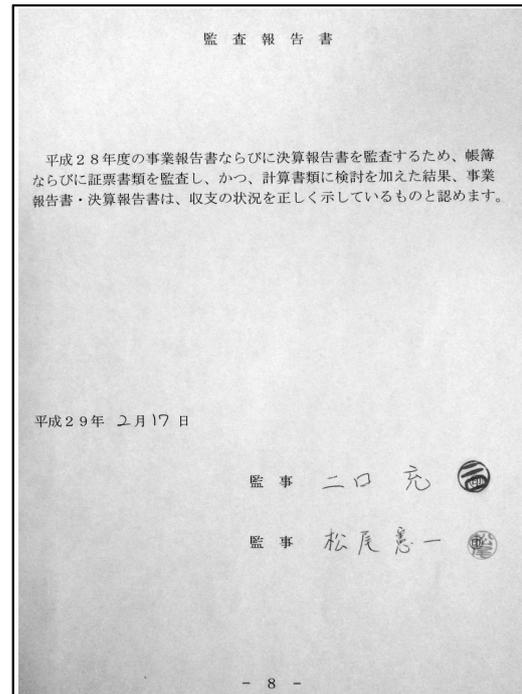
科 目	金 額		
I 資産の部			
流動資産			
普通預金 りそな銀行	1,564,126		
郵便振替口座	618,246		
郵便定額預金	6,000,000		
流動資産合計		8,182,372	
資産合計			8,182,372
II 負債の部			
流動負債			
未払金	0		
流動負債合計		0	
負債合計			0
正味財産			8,182,372

平成29年度予算

自 平成29年 1月 1日
至 平成29年12月31日

科 目	収入予算	科 目	支出予算
年会費	(4,100,000)	事業費	(2,200,000)
個人会費	2,700,000	学会総会補助費	1,500,000
法人会費	1,400,000	研究推進活動費	500,000
		研究奨励賞費	200,000
預金利息	(200)	会議費	(300,000)
		理事会等会議費	300,000
		管理費	(2,245,000)
		印刷製本費	200,000
		通信運搬費	350,000
		消耗品費	50,000
		給与・手当	1,360,000
		旅費	40,000
		諸雑費	110,000
		賃貸料	120,000
		ホームページ費	15,000
		予備費	(500,000)
			500,000
収支合計	4,100,200		5,245,000
繰越金	8,182,372		7,037,572
総計	12,282,572		12,282,572

※：平成30年度「第27回日本がん転移学会学術集会(総会)」補助費



名誉会員
 濟木 育夫
 谷口 俊一郎
 功労会員
 竹之下 誠一

寄稿 1 : がん転移研究を振り返って

谷口 俊一郎 名誉会員 (信州大学医学部包括的がん治療学教室)

九州大学大学院理学研究科博士課程 (生体高分子学教室) の途中から、九大医学部癌研究施設に出向して以来がん研究生活は40年以上になる。高校時代生物学は退屈に感じ、ものぐさな性格でもあり紙と鉛筆のみで仕事ができそうな理論物理学に憧れていた。しかし、大学進学前そして学部時代を通して激しい大学紛争に翻弄され、その影響で生命科学、がん研究に進路変更した。過激な学生活動家から物理学者が原爆を作ったという負の側面を日々聴かされるうちに学問の意義について悩み始め、単純な憧れは薄れ虚無的になった。講義のない日々が続く、図書館で暇潰しをしている時に分子生物学や生物物理学の本を見つけ、分子レベルで説明される生命科学の新鮮さに驚き、生きる実感も得られそうで胸がときめいた。そして、人間の病気、特に不治の病とされるがん、の研究をすれば社会に役立つ、少なくとも悪者扱いされることもなく生きていけるような気がした。今思うと短絡した主張に振り回された進路変更は若気の至りと恥ずかしくも思うが、兎も角その様な経緯でがん研究に携わることとなった。

がん研究は生化学教授・大村恒雄先生のお勧めで腫瘍病理学者である馬場恒男教授の研究室にお世話になった。胸を躍らせながらの始まりであったがセミナーの度に激しく叱られた。分子レベルからがん形質をシンプルに説明したいという思いが強かったのだが、その姿勢そのものを叱られたのである。「がんはそんな単純なものではない、理解できない様だから、がんで亡くなった患者さんの病理解剖を見て来い」と命じられ、半年近く病理学教室に出入りすることとなった。

最初の剖検は3歳位の幼ない患者さんで後腹膜から発生した神経芽細胞腫で腹腔内は腹水で満ち、腹腔内至る所に播種しブドウの様に多数の結節で覆われ、黄疸が強かったことを鮮明に覚えている。また肺転移で亡くなった患者さんなど何例か病理解剖の一部始終を見させて頂いた。その経験によるショックは胃潰瘍発作が生じた程に強烈であったが、馬場教授の言葉「がんは単純ではなく複雑な全身病」を体得できた。がん研究の中で、最も説得力のある教育だったと顧みて思う次第である。しかし、複雑さを納得したもの、天邪気な性格からやはり分子の言葉で誰にでも分かる単純な説明をしたいという気持ちは更に強くなった。ただ、馬場教授の前ではそのことは心に秘め、黙々と実験のみに専念した。

馬場研で助手に採用して頂いた後、米国NCI/NIHで故角永武夫先生の下で細胞骨格の研究をする機会が与えられた。当時がん遺伝子の発見が相次ぎ、NIHはお祭りの興奮状態であったが、全て造腫瘍性解析迄で、がんを難病とする転移の分子生物学的研究は皆無であった。従って、未開拓である遺伝子レベルでの転移研究に取り組もうと心に決めた。

帰国後、馬場研の主プロジェクトであったがん化学療法に携わる傍らで転移関連遺伝子を検索・同定するために転移能の異なる細胞間で2次元電気泳動解析を試みた。また転移形質には複数遺伝子が関与し、微小環境に対して鋭敏に応答する転写因子が重要と考え、fosがん遺伝子に着目した。そしてがん細胞へのfos始め細胞骨格遺伝子などの導入実験を行い、確かに遺伝子レベルで転移形質を促進あるいは抑制できることを学んだ。

その頃、日本がん転移学会の前組織であるがん転移研究会が故明渡均先生、故鶴尾隆先生らの音頭で立ち上がり、私も協力をとのお声をかけて頂いた。そして、実験病理学者中心だった転移研究領域に多数の分子生物学者が参入する時代を迎えた。

私はがん細胞から宿主に視点を移し、血管あるいは腹膜中皮細胞でがん細胞との相互作用でカルポニンh1 (CN) が鋭敏に発現低下することを見出した。その意義を知るべくCN欠損マウスを作製し、血管や腹膜が脆弱な易転移性宿主になることを示した。

細胞レベル、宿主レベルいずれも遺伝子操作で転移形質を制御し得ることが分かったので、信州大学に異動後は、がんの最も本質と思われる不安定性・不均一性をもたらす遺伝子の探索を核形態の変動を指標に試みた。核の異型性のがんの不均一性に対応すると仮定し、核形態制御因子

に拘ったのである。その研究過程で、アポトーシス、IL-1・産生に重要なcaspase1の活性化因子であり、自然免疫反応に重要なinflammasomeのmediatorであるASCを見出した。ASC遺伝子はメチル化で発現が低下し、ASC蛋白質は細胞質・核いずれにも存在し細胞運動制御能も認められた。ASCの核形態制御能は不明であるが、多機能で発現変動し易くがんの不安定性・不均一性研究に有用となる可能性を期待している。

一方、不均一な細胞集団であるがんを治療するにはヘテロな物質を標的とするのではなく固形がんの組織状態（例えば低酸素）を標的に選択的DDSを開発すべきというアイデアを持ち続けてきた。がん生物学理解には分子生物学というミクロ的手法が欠かせないが、がんの治療は対象が不均一系集団である故に、マクロ的情報にも注視して可及的シンプルな方法が重要と考えるのである。行っていることは固形がん選択的かつ持続的に制がん物質を産生させるために嫌気性ビフィズス菌の遺伝子組換え体を利用する研究である。大学発ベンチャー設立を経て臨床試験に至り現在は免疫チェックポイント阻害抗体産生系の開発に取り組んでいるが、この研究の始まりは馬場研時代に遡る。この間、菌の静脈内投与は非常識極まりないと厳しい批判を受けつつ継続した。最近の進捗を馬場先生は喜ばれ、信州大学に研究費を寄付して下さい。大いに感謝し励まされた次第である。

生命の不思議さを学びつつ、何とかがん患者さんのお役に立ちたいと悪戦苦闘してきたが、まだまだ多くの課題が残っている。今後も、自分なりの貢献を願って今しばらく研究に携わらせて頂きたいと思っている。また、もしこの拙文が僅かでも若い方々に参考になれば嬉しい限りである。

寄稿2：がん転移学会とともに

済木 育夫 名誉会員（富山大学 名誉教授）

この度、第26回日本がん転移学会学術集会（大阪開催）の懇親会の開始時に、谷口俊一郎先生と私が名誉会員として表彰され、とても素晴らしい記念の楯を土岐祐一郎大会長より贈呈されました。誠に名誉なことであると心から喜んでおりますとともに、名誉会員に推戴していただきました本学会理事会をはじめ、改めて会員の皆様に御礼申し上げます。

思い起こすに、本会の設立に関して、当時、明渡 均先生をはじめ末舛恵一先生、小林 博先生、渡辺 寛先生、鶴尾 隆先生ならびに多くの先生方のご尽力により、1992年に“がん転移を制するものはがんを制する”という理念のもとに「がん転移研究会」として発足し、2001年の第10回目において「日本がん転移学会」と名称を新たにしました。本会は、転移の克服を目指して基礎、臨床及び企業からの研究者が共同してがん転移の基礎研究ならびに臨床研究を活発に討論されてきました。さらに、第15回の総会では曾根三郎先生が大会長として国際癌転移学会と共同開催することにより、私共の研究成果を世界にアピールすることができました。私自身、発足当時から本会に参加し、これまでにがん転移の基礎と臨床に関する多くのことを勉強する機会をいただきました。

2007年には大会長を仰せつかり、第16回日本がん転移学会学術集会を富山にて開催させていただくことになり、その責任の重さに身が引き締まる思いとともに初心に戻って今一度再考する機会と場をいただきました。ゲノミクス・プロテオミクスなどの網羅的な解析技術や分子イメージング、画像診断などの技術が、飛躍的に進歩するとともに、最近では、抗体や遺伝子を用いて転移の克服に向けた新たな動きや展開も期待されています。

前身の研究会の研究推進活動の一環として、入村達郎先生（当時東京大学薬学研究科）を中心

に私も含めて多くの先生方とともに、東大の赤門の近くの会議室で「がんの浸潤・転移研究マニュアル」の出版に向けて、冊子の項目内容、執筆者等を皆で打ち合わせしたのを懐かしく思い出されます。その後、「続：がんの浸潤・転移研究マニュアル」も引き続いて出版されました。本誌は転移研究を進めている、あるいは始めようとする研究者ならびに新たな転移研究手法の紹介、標準化や普及などに会員のみならず、この分野の多くの研究者の一助になっているものと信じております。その後、転移学会となつてから転移研究がますます盛んになり、新しい技術革新、分子－細胞－生体レベルでの評価や新規薬剤の開発などに対応できる充実した実験操作書の作成を目指して、今までの冊子をさらに増補、改訂すべく、鹿児島大学の愛甲 孝先生や夏越祥次先生らとともに、「がん転移研究の実験手法」を編集・作成することにも関与させていただきました。この3冊子は学会の今後の新たな展開に向けても大切な財産であるものと信じ、それらの作成に微力ながらも関わることができたことを心から喜んでおります。

私も2017年3月末に24年間お世話になった富山大学を定年退職しましたが、日本がん転移学会の今後のさらなるご発展と会員の皆様のますますのご健勝・ご活躍をお祈りするとともに、微力ながらも何かではありますがお役に立てればと考えております。

今後とも何卒宜しくお願い致します。

寄稿3：第21回日本がん転移学会研究奨励賞を受賞して 受賞課題：線維細胞（fibrocyte）を標的としたがん転移・進展メカニズムの解明と 血管新生阻害薬耐性克服の試み

後東 久嗣（徳島大学大学院医歯薬学研究部 呼吸器・膠原病内科学分野）

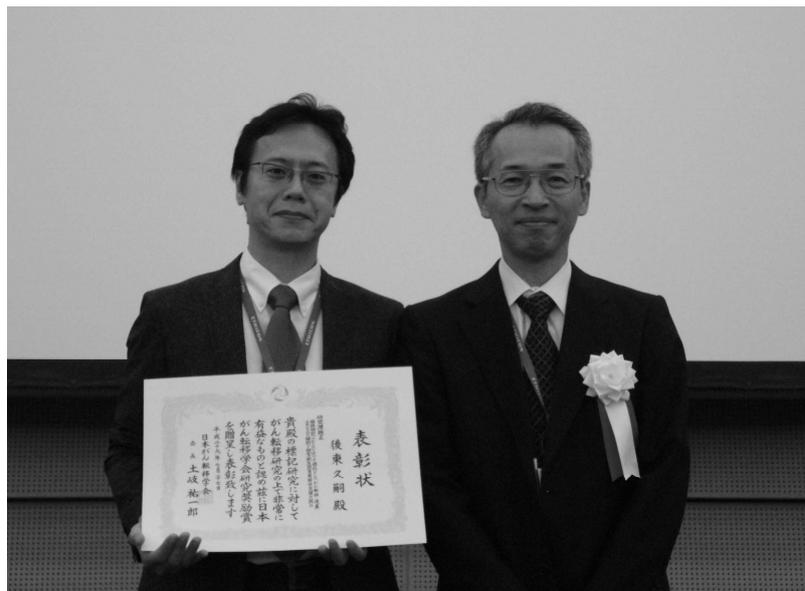
さる7月27日、28日に大阪市で開催されました第26回日本がん転移学会学術集会・総会におきまして、第21回日本がん転移学会研究奨励賞を頂戴いたしました。このような素晴らしい賞を頂き、身に余る光栄でありますとともに、ご推薦頂きました西岡安彦先生、選考委員の先生方、本学会長の土岐祐一郎先生、受賞記念講演にて座長の労をお取りいただいた夏越祥次先生、安井弥先生、本会運営に携わった皆様に厚く御礼申し上げます。

この場をお借りしまして、私の研究歴とがん転移研究への思いを綴らせて頂ければと存じます。私は平成9年（1997年）に徳島大学医学部医学科を卒業後、曾根三郎教授が主宰する母校の第三内科（現呼吸器・膠原病内科）に入局しました。当時、私の中では臨床と研究は別物であり、臨床医を目指す以上、研究は軽視しておりました。今の若手医師の多くもそうであるように、兎に角、手技の上達と症例数の経験のみが気になっていましたので、教授室に呼ばれて「大学院に行け」と言われた時はかなりの衝撃を受けました。私の抵抗もむなしく、2年目から大学院に入るわけですが、今思えば、早くもこの時期に私の医師人生最大の分岐点の一つがあったように思います。翌年からは、当時の九州大学大学院遺伝子生化学講座 桑野信彦教授のもとで約2年間過ごさせて頂き、がんの血管新生をテーマに本格的に研究活動を始めることとなりました。桑野先生にはやさしくも厳しくご指導いただき、実験手技の基本だけでなく、Western blot用のゲル板（ガラス板）の洗い方やピペット（当然ガラス）の取扱いなどに至るまで、基礎研究の基礎中の基礎を叩き込まれました。母校に戻ってからは当時アメリカ留学から戻られたばかりの矢野聖二先生（現金沢大学教授）に直接ご指導いただきながら、マウスモデルを用いた血管新生とがん転移研究に従事し、研究のおもしろさや意味をようやく分かりかけていたように思います。ちなみに、この年（2001年）に研究会から学会に名称変更して初めての第10回日本がん転移学会学術集会の会長を曾根先生が務められ、ここから本学会と関わらせて頂くようになりました。

数年間の病院勤務の後、海外留学の機会を得ることが出来ましたが、留学先は当時のアメリカ

胸部学会（呼吸器領域最大の学会）の会長であられたJo Rae Wright教授の教室で、サーファクタント蛋白質の研究室でした。がん研究とは無縁の研究室で急性肺傷害の研究に携わりましたが、帰国後、「必ず繋がるはずだ」との曾根教授のアドバイスのもと、サーファクタントの肺癌転移における役割について研究することが出来ました。この頃には、私の中で一つの確信が生まれました。それは、「すべて繋がっている」ということです。臨床と基礎研究も濃く繋がっていますし、良性肺疾患と肺癌も細胞分子レベルで繋がっています。私は一呼吸器内科医ですが、近年、腫瘍学として肺癌を見る傾向が強いと感じます。全く正しいと思いますが、呼吸器病として肺癌を見る切り口もアリだと思っています。そして、曾根先生の後を継がれた西岡先生に、「呼吸器疾患の一つとして肺癌を見る」という共通認識（と信じています）のもとご指導いただいたことが今回受賞に至った研究に繋がりました。

今、腫瘍学の領域はdriver mutationの発見やそれを標的とした治療開発を中心に、急速に発展しています。その中で敢えて、転移研究を通して呼吸器疾患として肺癌を見ることで発見できることもあると信じて、今後も転移研究を独自の視点で発展させていきたいと感じておりますし、それをサポートしていただけるのが本学会です。アットホームな雰囲気ながらも熱い議論が飛び交う本学会に参加することを毎年楽しみにしております。最後になりましたが、これまで私を育てて下さった曾根先生、桑野先生、Wright先生、そして西岡先生に改めて御礼を申し上げます。また、今回の研究成果は日本全国の多くの先生方のご協力なしでは得られませんでした。全員に頂いた賞を私が代表して拝受したと理解しております。本当にありがとうございました。今後とも諸先生方のご指導、ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。



第28回日本がん転移学会学術集会・総会の案内

- 会 長 : 夏越 祥次 (鹿児島大学大学院 腫瘍学講座 消化器・乳腺甲状腺外科学)
- 会 期 : 平成31年 (2019年) 7月 日 (木) ~ 日 (金) (未定)
- 会 場 : (鹿児島県)

日本がん転移学会会則

第1章 会の名称

第1条 本会を「日本がん転移学会」“The Japanese Association for Metastasis Research”と称する。

第2章 目的および事業

第2条 本会は、がん転移による死亡率を減少せしめるべく、基礎、臨床、開発（薬剤、機器等）研究を通じて実質的討議を行い、がん転移研究の発展、診断・治療の進歩普及に貢献する事を目的とする。

第3条 本会は、前条の目的達成のため、次の事業を行う。

- (1) 学術集会を少なくとも年に1回開催
- (2) がん転移に関する研究発表、情報交換、資料の収集、教育及び研修
- (3) 本分野に関して海外研究者との連携
- (4) その他本会の目的達成に必要な事業

第4条 本会の事務局は、大阪市中央区大手前3丁目1番69号 大阪国際がんセンター・研究所内に置く。

第3章 会員

第5条 会員は、本会の趣旨に賛同し、評議員、顧問あるいは名誉会員の推薦を受け、理事会の承認を得て入会した個人ならびに法人（法人格のない団体を含む）とする。

第6条 会員である法人の取扱いは次による。

1. 法人に所属する個人はその法人の承認を得れば本会の事業に参加できる。
2. 前項により参加する個人からは年会費を徴収しない。
3. 会員である法人は登録者3名迄と会計事務担当者1名（兼任も可）を決め事務局に届出なければならない。

第7条 会員は評議員会において別に定める会費を納入しなければならない。

第8条 引きつづき2年以上会費を滞納したものは評議員会の議により、その資格を喪失する。

第9条 顧問は理事会にて推薦、評議員会にて承認を受ける。また、本会に対して特に功労のあった者は、名誉会員・功労会員として理事会にて推薦、評議員会にて承認を受ける。顧問・名誉会員・功労会員は本会の発展のために適切な助言をする。顧問・名誉会員・功労会員は会費を要しない。

第4章 役員および役員会

第10条 本会に会長1名、副会長1名、若干名の理事ならびに評議員、監事2名、事務局幹事1名を置く。

* 事務局幹事は会長が任命し、会長及び理事会の事務を補佐する。

第11条 会長は本会を統括し、理事会・評議員会では議長となる。副会長は、次期会長がこれを務め、会長を補佐し会長に事故のある場合はその職務を代行する。会長・副会長の任期は1年とする。

第12条 理事は評議員会にて、評議員の中から選任される。任期は3年とし、任期終了後1年間は再選されない。理事は会長を補佐し日常の会務について決定し、執行する。理事会の構成は、会長・副会長・理事および前会長とする。理事会は構成員の2/3以上の出席（但し委任状を提出した人は出席とみなす）により成立し、議決は出席者の過半数をもって決する。

第13条 評議員は会員の中から選出される。評議員の任期は3年とし、再任は妨げない。評議員会は会の運営に関する重要事項を審議決定する。評議員会は評議員の1/2以上の出席（但し委任状を提出した人は出席とみなす）をもって成立し、議決は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第14条 監事は評議員の中から選出される。監事の任期は1年とし、再任は妨げない。監事は本会の会計および会務を監査し、理事会・評議員会にて報告する。

第15条 次期会長・理事・評議員・監事の選出は日本がん転移学会役員選任規程に基づく。

第5章 総会および学術集会

第16条 総会は毎年1回学術集会の時期に会長が招集し、総会の議長となって次の議事を行う。

1. 会務の報告
2. 会長が必要と認める事項

総会の議事は出席者の過半数によって決する。可否同数のときは議長の決するところによる。

第17条 会長が必要と認めたときは評議員会の議を経て、臨時総会を随時開催することができる。臨時総会の議案は定期総会に準ずるものとする。

第18条 学術集会は毎年1回会長が主宰し、研究発表、意見交換を行う。

第19条 本会会則第2章第3条の4の規定に基づき各種の委員会を設けることができる。委員会の設置、その構成及び運営方法は、理事会において討議し、評議委員会にて承認する。また会の目的を達成するための具体的、実質的討議を行うため、研究推進会議(班)を設置することができる。その構成及び運営方法は理事会において討議し、評議委員会にて承認する。研究推進活動の経過については、学術集会で報告する。

第6章 会計

第20条 本会の経費は会員が拠出する会費ならびに協賛金等をもってこれにあてる。

第21条 毎年度収支決算は会長が作成し、監事の監査を受け、評議委員会の承認を得て、毎年総会において報告する。

第22条 会計年度は毎年1月1日に始まり12月31日に終わる。

第7章 会則の変更

第23条 本会会則の変更は理事会、評議委員会および総会において、各々出席構成員の2/3以上の承認を得なければならない。付則

本会則は平成12年7月1日よりこれを実施する。本会則は平成14年6月8日一部改正した。本会則は平成18年9月3日一部改正した。平成29年3月25日 大阪府立成人病センターの移転及び名称変更に伴い第2章4条を変更する。

日本がん転移学会役員選任規程

第1章 役員を選任

第1条 会則第15条により次期会長(副会長)・理事・評議員および監事は本規定に基づき選出される。なお、役員は65歳をもって定年とする。

第2章 次期会長(副会長)の選出方法

第2条 次期会長の選出に際しては、評議員全員に告示する。候補者は所定の様式で抱負を述べた資料を理事会に提出し、理事会はこれを討議し候補者1名を推薦する。

第3条 次期会長の選出は評議委員会で行う。

第3章 理事の定数と選出方法

第4条 理事の定数は個人評議員より約6名(原則として基礎3名、臨床3名)、法人評議員より約2名とする。

第5条 理事は会則第12条により評議員の中から選出される。

第6条 個人会員理事は評議員の選挙により選出される。候補者は所定の様式で抱負を述べた資料を評議委員会に提出する。

第7条 法人会員理事は理事の選挙により選出される。

第4章 評議員の選出方法

第8条 評議員は会則第13条により会員の中から選出される。

第9条 評議員の選出は理事会で行う。

第10条 個人評議員は、一定の条件(細則に定める)を満たす者とする。

第11条 個人評議員の候補者は所定の様式による資料を本会事務局に届け出ること。

第12条 法人会員評議員は理事会で選出する。

第5章 監事の選出方法

第13条 監事は会則第14条により評議員の中から選出される。

第14条 監事の選出は理事会で行う。

付則 1. 理事選挙の施行は次期評議員が選出された(平成15年度)以降とする。

2. 本役員選任規程は平成14年6月8日よりこれを実施する。本役員選任規程は平成15年6月29日一部改正。

3. 本規程の変更は理事会および評議委員会において、各々出席構成員の2/3以上の承認を得なければならない。

4. 役員任期は、65歳になる年の12月末で終了する。

日本がん転移学会役員選任規程細則

1. 個人会員理事の選出方法

1) 投票は原則として郵送とする。

2) 評議員は基礎系候補・臨床系候補に各1票投票する。

2. 個人評議員の選出条件

1) 原則として3年以上本会会員であり、会費を完納していること。

2) 本会や関連学会、学術雑誌などですぐれた評価を受けていること。

3. 評議員の資格

1) 3年連続して評議委員会を欠席した者はその資格を喪失する。

日本がん転移学会 顧問・名誉会員

顧問： ^(故) 菅野 晴夫	杉村 隆	^(故) 明渡 均	
名誉会員：愛甲 孝	入村 達郎	小林 博	^(故) 佐藤 春郎
^(故) 末舛 恵一	高後 裕	清木 元治	済木 育夫
曾根 三郎	谷口 俊一郎	^(故) 田中 健蔵	田原 榮一
^(故) 塚越 茂	^(故) 鶴尾 隆	新津 洋司郎	^(故) 螺良 英郎
^(故) 中村 久也	^(故) 磨伊 正義	宮坂 昌之	門田 守人
渡辺 寛	Isaiah J. Fidler		
功労会員：東 市郎	^(故) 阿部 薫	^(故) 尾形 悦郎	岡田 保典
小野 真弓	垣添 忠生	神奈木 怜児	北島 政樹
^(故) 久保田 哲朗	久保田 俊一郎	桑野 信彦	佐治 重豊
清水 暁	高橋 俊雄	竹之下 誠一	竜田 正晴
田中 紀子	寺田 雅昭	豊島 久真男	中津川 重一
西村 行生	^(故) 馬場 正三	宝来 威	細川 真澄男
宮城 妙子	宮崎 香	武藤 徹一郎	

日本がん転移学会役員

会長：越川 直彦 (27回)			
副会長：夏越 祥次			
前会長：土岐 祐一郎			
理事：海野 倫明	越川 直彦	国安 弘基	竹田 和由
夏越 祥次	西岡 安彦	大鵬薬品工業(株)	中外製薬(株)
監事：川田 学	日本化薬(株)		
評議員：足立 靖	石井 秀始	板野 直樹	伊藤 和幸
伊藤 壽記	伊東 文生	稲田 全規	猪原 秀典
井上 正宏	植田 政嗣	上原 久典	大上 直秀
大島 正伸	太田 哲生	岡田 太	沖 英次
奥野 清隆	尾崎 充彦	片岡 寛章	加藤 淳二
加藤 靖正	加藤 幸成	神田 光郎	北川 透
北川 雄光	北台 靖彦	隈元 謙介	小泉 桂一
小林 浩	今野 弘之	堺 隆一	坂本 修一
坂本 毅治	佐々木 隆光	澤田 鉄二	清水 英治
清水 史郎	滝野 隆久	田中 稔之	谷口 博昭
茶山 一彰	中 紀文	永野 浩昭	中森 正二
中山 淳	馬場 秀夫	浜田 淳一	早川 芳弘
東 伸昭	樋田 京子	福島 剛	藤田 直也
藤原 俊義	藤原 義之	二口 充	松浦 成昭
松尾 洋一	溝上 敦	三森 功士	向田 直史
望月 早月	森 正樹	八代 正和	安井 弥
安田 卓司	安本 和生	柳川 天志	矢野 聖二
矢野 雅彦	山本 浩文	山本 博幸	矢守 隆夫
由井 理洋	横崎 宏	横田 淳	横山 省三
吉治 仁志	渡邊 昌彦		
旭硝子(株)	エーザイ(株)	協和発酵キリン(株)	第一三共(株)

(アイウエオ順)

事務局幹事：井上 正宏

(法人評議員については登録会員の中から各社より各1名選任される)
評議員任期：平成29年7月29日～平成30年/第27回総会まで
(第25-27回)

日本がん転移学会事務局 宛
Fax : 06-6945-0355

日本がん転移学会連絡用紙

日本がん転移学会会員の種々の変更・退会等の連絡はこの用紙をご利用ください。
会員番号(郵便物の宛名ラベルに印刷してある貴氏名の右下の数字)、並びにご氏名(フリガナ)を明記の上、
変更したい事項をご記入いただき、封書またはFax、E-mailにてご連絡ください。

年 月 日

住所等変更 ・ 退会 届

(上記、どちらかを○で囲んでください)

(フリガナ)	会員番号
氏 名	生年月日
勤	勤務先名称(部所属も記入してください)
務	〒
先	Tel
	Fax
	E-mail
自	〒
宅	Tel
	Fax
	E-mail
雑誌等送付先を○で囲んでください。 勤務先 ・ 自宅	
変更年月日	西暦 年 月 日 付で変更します
退 会 届	西暦 年 月 日 付でもって退会します
その他	

※個人情報について

会員への連絡、会誌等の発送等、学会活動の目的に限定して利用します。

事務局からのお願い！

この数年は名誉・功労会員、新理事の方々のご協力により内容も充実してきましたが、吾こそはと思われる方のご寄稿もお待ちしています。
遠慮せずに事務局までご連絡をお願いします。

研究奨励賞の応募も少ないです。若手の先生方、何度でもチャレンジして下さい！

=====
[発行・編集]
日本がん転移学会事務局
Tel/Fax 06-6945-0355 (直通)
E-mail: office-jamr@umin.ac.jp
〒541-8567
大阪府中央区大手前3丁目1番69号
大阪国際がんセンター・研究所内
=====

2017.9